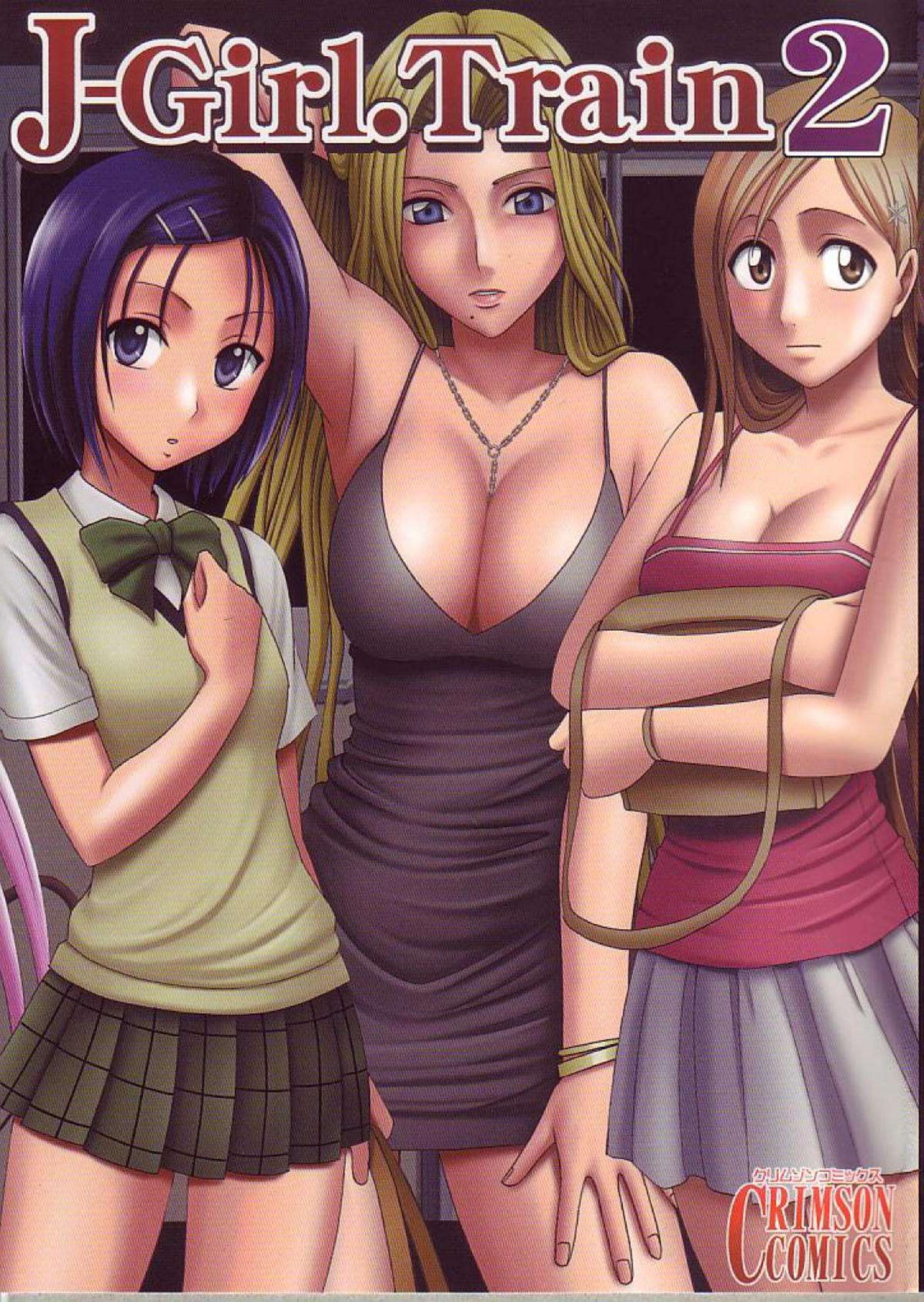


J-Girl Train 2



クリムソンコミックス
CRIMSON COMICS



乱菊は死神でありながら、人間の女の服装を好んでいた。特に挑発的な格好がいい。男たちの興奮を誘えるのが、心地好かった。

その日も乱菊は刺激的な服装で、人のひしめく電車へと乗り込んだ。電車の中というものは特に興奮させるらしく、時に触れてくる者までいるのだ。しかしこれまで少ししかお尻を触られる程度。

乱菊にとつてはなんという「」ともない。どうせ今日もその程度だろうと高をくくつていた乱菊に、触れてくる者があつた。普段よりも混雑していく、人目につきにくい状態だったからだろうか。

その者は、最初少し遠慮がちに乱菊の尻や腹に触れた。

乱菊は心中で苦笑しながら、その度胸ある者の出方を見ていた。少しくらいなら触らせてあげてもいい。そんな風に、高みから見ていたのだ。主導権さえ握られなければ、この程度の行為は取るに足らないもの。そう思っていた。



おやおや
そろそろ
濡れ始めてる
みたいですね？

（…なかなかいやらしい手つきをするじやないの）
その男の行為は徐々に
エスカレートしていった。
尻から腹へ、腹から胸へと移る手。
そしてまた下へ降りていく。
ついに男の手は、ショーツの中にまで
潜り込んでいた。
なかなかの度胸だ。
しかし、あまり調子に乗らせるわけには
いかない。
乱菊は陰部を弄られながらも
冷静に対処しようと身をよじる。
しかし男の指は的確にクリトリスを
刺激していた。快感の痺れが乱菊を襲う。
このまま男の手を振り解くのは簡単だ。
乱菊は、快感に身を委ねた。
もう少しだけ。もう少しだけ、と
その快感を味わい始める。
男の指の動きに合わせて腰をくねらせ、
熱い吐息を紡ぎ出す。
そう。あと、もう少しだけなら……
乱菊は、知らぬ間に主導権を放棄していた。



あふくよかで
いい乳房です
これは揉み甲斐がある

なかなか
気持ちいいじやない
もう少しだけなら
許しても…

足を閉じても無駄です
ぼくはこういうのに
なれますから…



これは…
従つて見せてやつてるだけよ？
いつだつて逃げられるんだから！

あまりに強いクリトリス性感に一頭我を忘れていた乱菊。気がつけば、男に支えられるようにしてボックス席へと連れ込まれていた。そこで改めて、相手が複数であつたことに気付く乱菊。あたたちは、ボックス席の前と横を陣取り、乱菊の身体を開き始めた。普段ならもう怒りが爆発して男たちを蹴散らしているはずなのに、それができない。このままおとなしく従つていればより強い快楽が得られるのだと身体が悟っていた。

しかし、心ではそれは認めたくない。仮にも自分は死神。もちろんこの男たちはそんなコトは知らないだろう。知るよしもない痴漢したい女。されたがつての女に違いない。男たちは腕利きの痴漢だったから、まさかこれ以上のことになるとは思つてもいなかつたのだ。

乱菊は痴漢行為そのものを知らなかつた

こんなに大きいのに
感じやすいなんて
いいオッパイですね

んウ
乳首もビンビンじや
ないです
ここはどうして
あげましょ

気持ちいいワケじやない…
こんな奴らに
感じさせられてる
わけじやない！



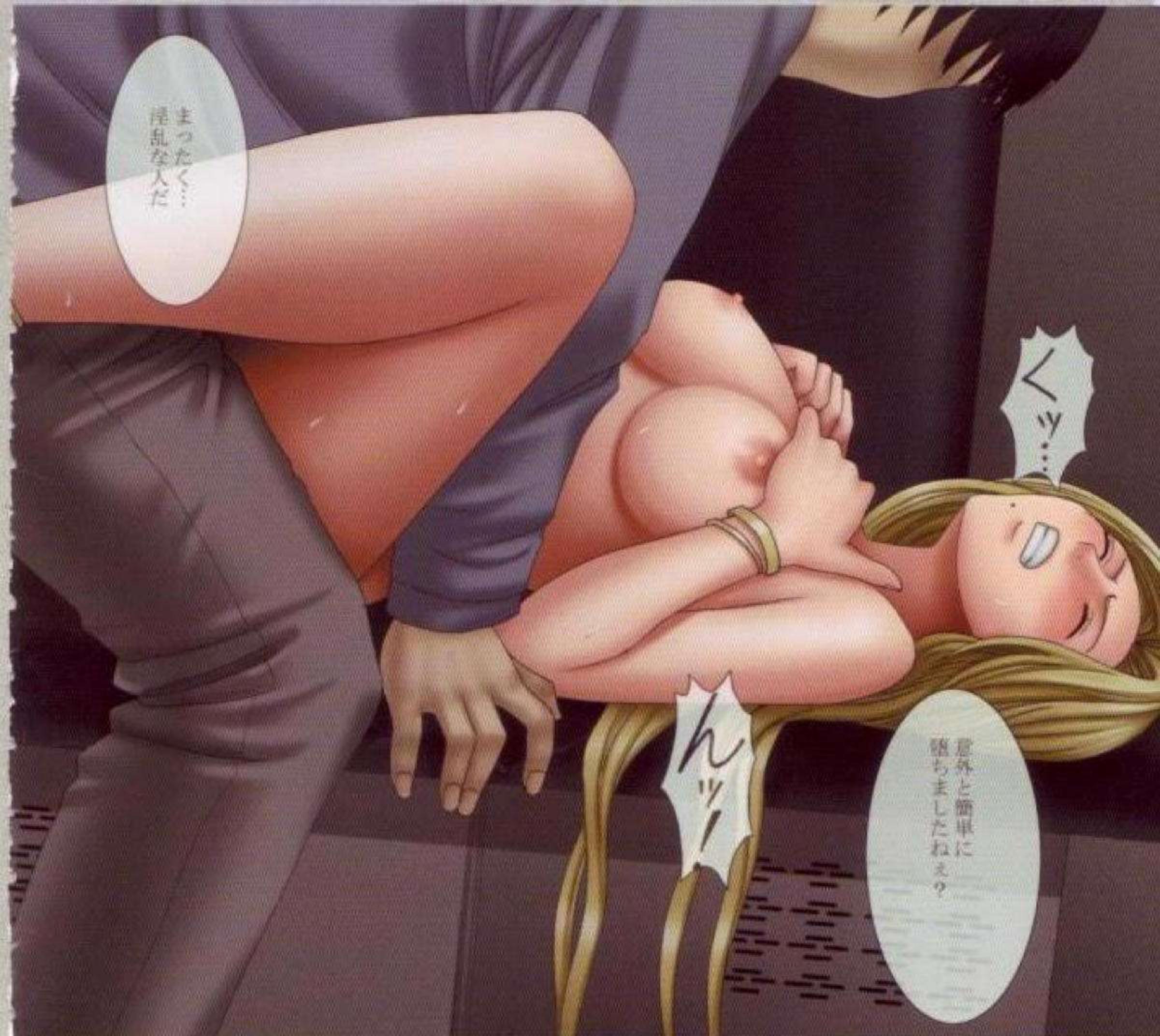
あともう少しだけなら……

あまりに強いクリトリス性感に一瞬我を忘れていた乱菊。気がつけば、男に支えられるようにしてボックス席へと連れ込まれていた。そこで改めて、相手が複数であつたことに気付く乱菊。あつたこと、ボックス席の前と横を陣取り、男たちは、ボックス席の身体を開き始めた。普段ならもう怒りが爆発して男たちを蹴散らしているはずなのに、それができない。このままおとなしく従つていればより強い快楽が得られるのだと身体が悟っていた。しかし、心ではそれは認めたくない。仮にも自分は死神、しかも副隊長という身分なのだ。もちろんこの男たちはそんなコトは知らないだろう。知るよしもない。痴漢したい女。痴漢したがつてゐる女に違いない。男たちは腕利きの痴漢だつた。乱菊は痴漢行為そのものを知らなかつたから、まさかこれ以上のことになるとは思つてもいなかつたのだ。

はあー

あー

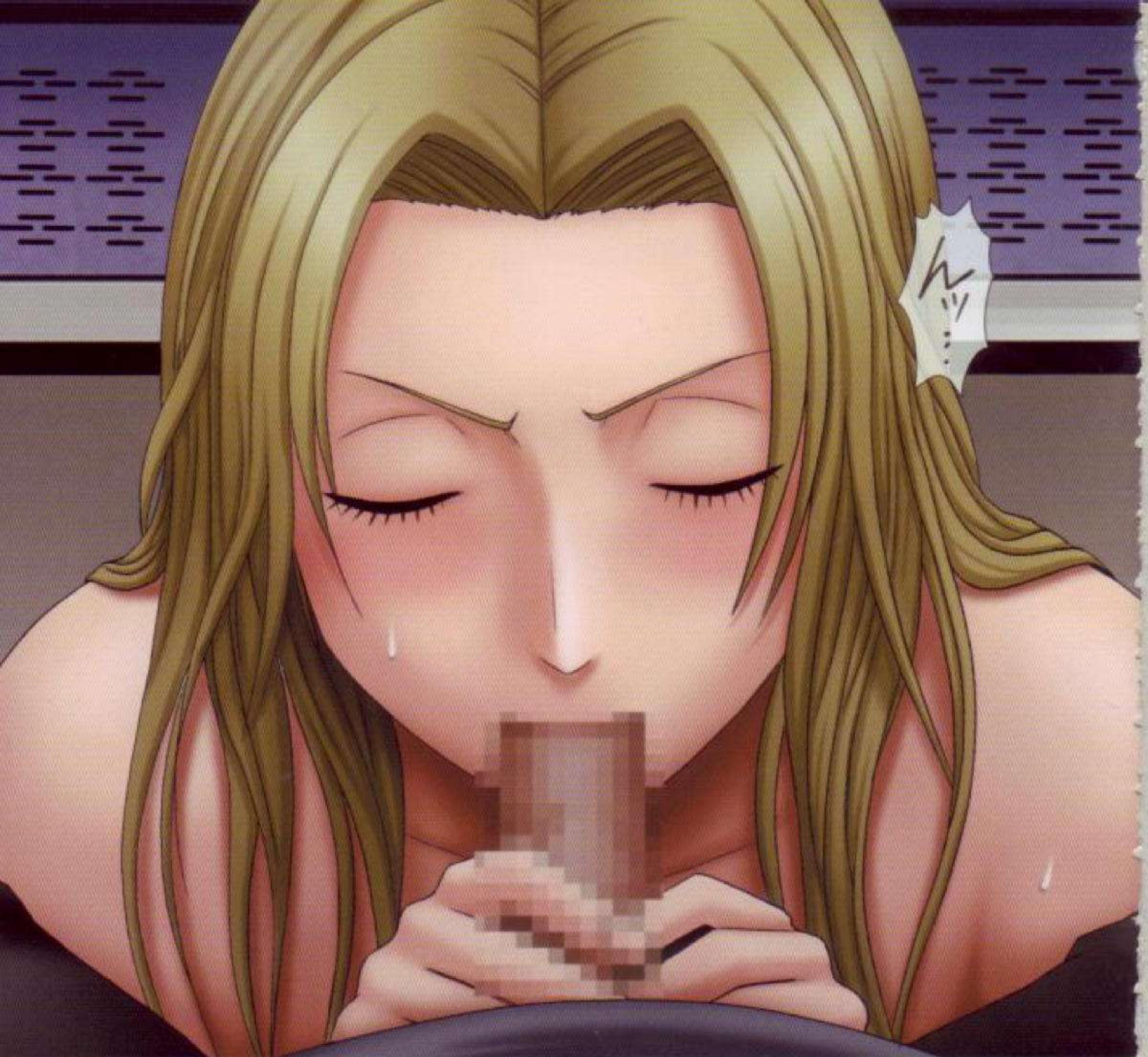




意外と簡単に
寝ちゃましたねえ？

いつの間にか、挑発的な衣服はすべて剥ぎ取られていた。そそり立つた乳首は指でつままれ舌で嬲られていた。クリトリスはもう刺き出しになり、ひくひくとうごめき、快楽を求めていた。膣内を指でほじくり回され、もう否定できない。淫らな水音を聞かされていては、指で弄り回されると、男根を埋められること。どれほどの差があるのだろうか。そして乱菊は、ついに男のペニスを受け入れていた。激しい快感に身を震わせながらも、まだ心の中では抵抗の言葉を呟く。自分は決して、男たちの慰みものになつているわけではないのだと。オモチャや扱いされているわけではないのだと自分自身に言い聞かせる。しかし腰を打ち付けられ、子宮口を叩き付けられ続ければ、理性は消し飛ぶ。ついに乱菊は、自分自身に言い訳するのをやめた。

まつたく
乱など人だ



男のペニスを口に含む。
その匂いと味が、乱菊の性本能を刺激した。

先走り液の粘つき。男独特の匂い。
ビクビクと脈打つ熱い塊。

そのすべてにむせ返るが、
同時に強い官能を覚えていた。

もう、自分自身に嘘をつくことはない。
自分は確かに快感に震えている。

そしてこの性行為の主導権さえ
男たちに握られていると理解する。

ここにいるのはもう護廷13隊の死神ではなく、
1人の性に飢えた女だった。

男たちはそんなことも知らず、
ただ従順になつた乱菊の舌戯に酔いしれるだけ。

喉の奥まで呑み込む口使い。
艶めかしく蠢く舌

そして切なげな鼻息。
それらが男の征服欲を凄まじく刺激する。

刺激は興奮となつて駆け上る。
男は慢することなく、

乱菊の口腔へとその熱い想いをほとばしらせた。

あたし
こんなのが初めて……！

ザーメンに催淫効果でもあつたのだろうか。
乱菊のヴァギナはまた熱く熱していた。
挿入されただけで脳天に官能の電撃が走り、
軽く達してしまうほど。

囮つていた男たちも、
そんな乱菊を見て耐えられなくなっていた。
挿入している男以外にも四方八方から
手が伸ばされ、乱菊を撫で回す。
熟れきった肢体は触れられるだけで快感を導き、
深い喘ぎをつむがせる。
深く挿入されてはイキ、乳首をつねられてはイフた。
場所もわきまえずに声をあげる。
その声に、男たちがまた律儀に反応する。
車内はいつの間にか、公開レイブショー
じみた空間になつていた。
そしてまた乱菊の声があがる。
絶頂の悲鳴は、すべての男たちの性欲を刺激した。

すごい！
またいく！
いつもやう！

こんなに何度も
いくなんてえつ！

ああああ
ああああツ
！



その彼女お
それは、下心の見え透いた声だつた。
春菜はその声をかけられて初めて、
自分が孤立していたことを知つた。

この人たちは誰だろう。

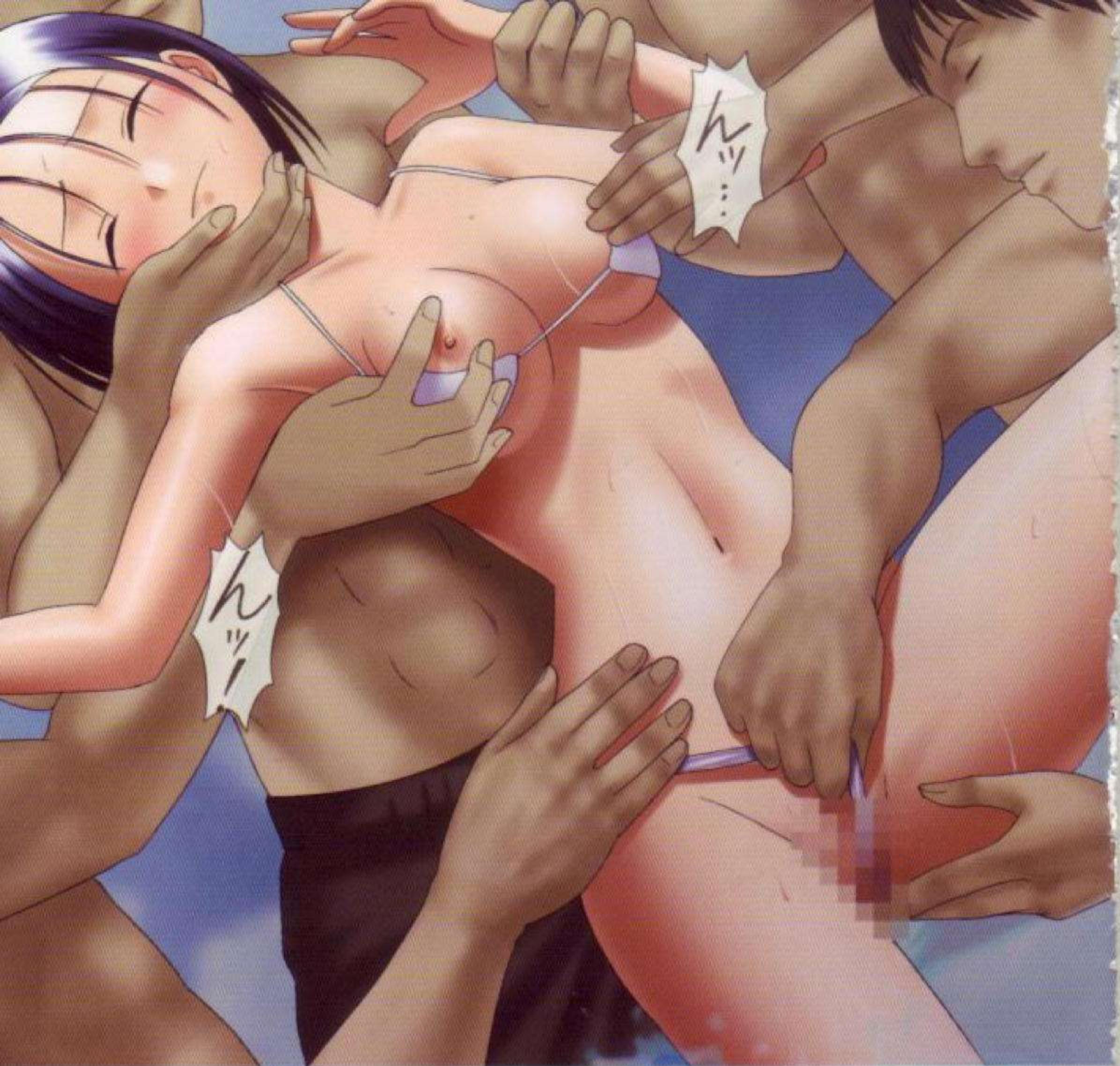
様々な考えが浮かんでは消える。

それとも、男たちは春菜に友好的だつた。
少くとも、男たちは春菜に下心なのだが、
春菜はぐれた寂しさに負けてしまう。

事情を説明すると、男たちは

友達と一緒に探してくれると言つて、

春菜を導いた先は、人気のない場所。
こんな所に友達たちがいるはずもない。
春菜はここにきて、まんまとナンバ男たちの
屋にはまつたのだと気がついた。



「へへ、もう逃げられないせ?
ここには誰も来ないんだ」
(なんでこんな人たち
信用しちやつたんだろう。
私の馬鹿あ……)

怖じ気づいた春菜を見て、男たちは一齊に襲いかかった。四方から手を伸ばされ、抱きつかれる。水着を剥がされそうになり、必死で抵抗した。男たちは手慣れているのだろう。慌てる事なく、春菜を押さえ込んでいく。無理に水着を引き剥がすのではなく、少しずらすだけで十分楽しそうだった。春菜にしてみれば脱がされないのはいいが、触られてしまえば変わらない。水着の上から、そしてすらされた横から素肌を直に触られる。

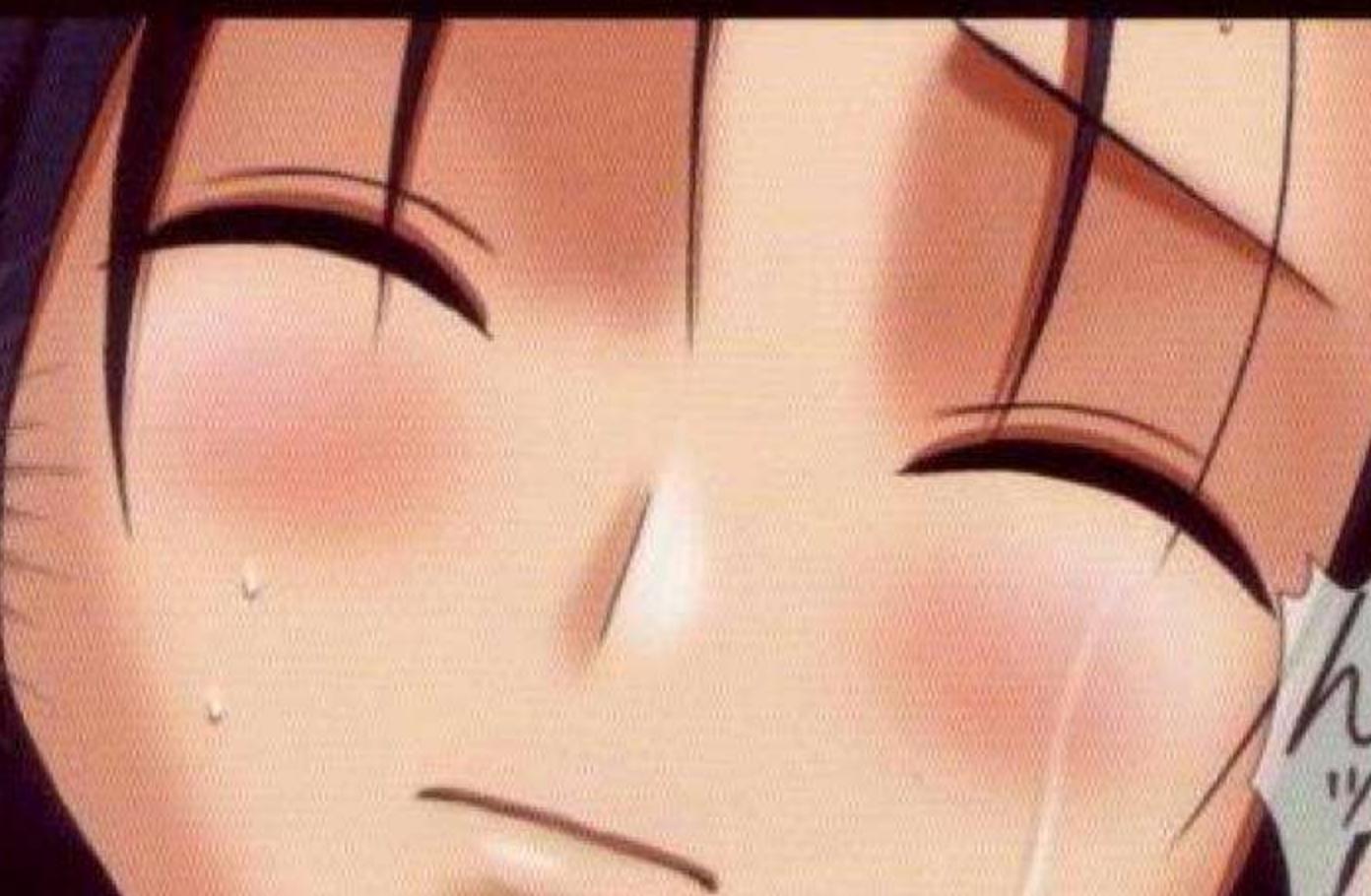
乳房を、そして陰部を触られ、春菜は高い悲鳴をあげた。しかし、男たちは慌てない。その声は誰にも届かないよと笑うだけ。それでも春菜は、諦めまいと抵抗した。悲鳴を聞けば誰かが助けに来てくれると信じて。

おい
そつち押さえて
おけよ

こんな上玉
そうそうお目に
かかれないぜ

結城が助けて！
たすけてっ！

もう頭が
クラクラ
してきた……



ほ

あ
ッ!!





しかし、呼べど叫べど誰も来はしなかつた。男たちは徐々に下卑た笑いを深めながら、春菜の身体をもてあそび続ける。まるでオモチャのように扱いながら、欲情した顔を見せつけた。まだ経験のない春菜でも、男たちの望みは分かつた。犯す気なのだ。それを悟ると、また悲鳴が出た。血の気が引いて、声までも弱々しくなつていて。男たちはけらけらと笑った。それがあまりにも異形すぎて、春菜は人間を相手にしているのだとと思わないようにする。思案されて、抵抗する。相手を引っ搔いたりはたいたりもする。しかし男たちは、子猫にじやれつかれてる程度にしか思わないらしい。すべての抵抗は、むなしく空を切っていた。

これから
たつぶり男を
教えてやるぜ

ほりー

あ
ッ!!

こんな
に
かわいい
女が
いるの
か?

あ
ッ!!

く
ッ!!



なんで!?
なんでこんなコトになつたの!?
こんなのおかしいよお!

このま○この感じは
処女じやなきや
味わえねえ

そしてついに、
すべての抵抗を無にされてしまう。
リーダー格の男が、破壊的に膨れ上がった
ペニスを春菜の大事なところに押し付けた。
不覚にも濡れ始めていたヴァギナが、
その肉棒を呑み込んでいく。
破瓜の痛みと激しい快楽が春菜を襲い、
また高い悲鳴をあげさせた。
しかし、その声色に淫らな色が
ついていることに、春菜自身も気付いていた。
初めてのセックス。

その快感に酔いしれてしまう春菜。
これは強姦だ、いけないのだと分かつていても、
身体は快楽に反応してしまう。

男たちもそんな春菜をはやしたてた。
早く替わってくれとシユフレヒコールがあがる。
淫らな攻め言葉を一身に浴びながら、
春菜は徐々に理性をも飛ばしていった。
そしてついに、
初めての絶頂までも味わってしまう。

あー
やつぱ処女
最高だわ



なかなか上手じゃないか
いいんだぞ

んッ…

あとはもう、男たちの言うがまま、
するがまだつた。
されるがままにフェラチオをする。
もちろん初めてだが、できなくはない。
頭を押さえつけられ、
喉の奥までペニスを押し込まれた。
苦しさはあるが、
なぜか心地好さを覚えてしまう春菜。
舌を動かすと男の腰が浮かび上がる。
その感覚は楽しいものだとえた。
別の男がついに水着を剥ぎ取る。
それにさえ気付かず、春菜はフェラを続けた。
その末に待っていたのはもちろん射精。
そりいっぽいに精液の味が広がっていく。
それを飲み下せばもう、春菜の理性など
こなにも当然。
ここにいるのは、性の悦びに目覚めた
1人の女でしかなかった。



ないい締するようになつたじやないか？
そんなに気持ちいいのか？

もつれ奥まで
刺さるようにな
自分で腰を振つてみな？

2

騎乗位で突き上げられ、小さな身体を跳ね回される。小振りな乳房もたぶたぶと踊り、男たちからは喝采があがる。下品な言葉でさえBG Mにして、春菜は快楽をむさぼり続けた。腰を跳ね上げられると、腰を串刺しにされているようで苦しい。しかし、その苦しみもまた快楽になつた。次第に自ら腰を動かしていく。腰を落とすと、子宮まで串刺しにされるような感覚に襲われた。その鮮烈な快感に、春菜は何度も絶頂する。高い悲鳴は、もはや快楽の色しかない。膣内に熱いものが満たされると、挿入する男に入れ替わった。長いヘニス、太いヘニス。さまざまな形を楽しむ余裕さえ出始めた春菜。何度もおよぶ絶頂は、少女から理性だけでなく意識さえも奪つていった。



これは
もしかして痴漢!?
なんてことなの
こんな時に!

セフィリアにとつて、長老からの指示は絶対だつた。その日は長老の命で、敵対する組織の幹部を尾行することになつた。セフィリアにとつては簡単な仕事だ。そんな気の緩みがあつたのかもしない。電車に乗り込み、敵をうかがう。尾行していることには気付いてしまさそうだった。しばらくそのまま電車に乗つていたセフィリア。その尻に、なにかが触れた。誰かの持ち物でもかすつたのだろう。そう思つてなんの反応もしなかつた。しかし、尻に触れたものがモソモソと動き出して、思わず声が出そうになる。それは物などではなく、男の手だつた。男が遠慮なく尻を撫で回していたのだ。任務中だといふのに、のんきに痴漢こときに横つてはいられない。しかしここで痴漢をひねり上げては目立つてしまつて、尾行が失敗に終わる。どうしたものかと思案していたセフィリアの耳の無線に長老からの指示が入つた。

セフィリアは諦めて、痴漢たちを無視することにした。

尾行を成功させるのが優先だ。
目立つ行動は控えろ——
確かにそれは正論だつた。



ほら
その手をどこで?
こんな服
脱いじまおうぜ?

痴漢たちはそれを羞恥による無抵抗だと勘違いしたらしい。にも言わないセフィリアに対して、ないように痴漢行為をし始めた。なんでこんな時に限って、こういうふしだらな者たちが湧いてくるのか。セフィリアは唇を噛みながらも、任務遂行を優先するため身動きひとつしない。痴漢たちはセフィリアにしか聞こえないようくクスクスと笑った。そしてすぐに尻を撫でたり胸を揉むだけでは飽き足らなくなつたらしい。衣服を脱がし、その素肌を直に触り始めたのだ。さすがにこれには抵抗せざるをえない。しかしセフィリアが手をあげようとするとやいなや、長老からの指示が入った。断じて目立つてはならない。それにがあるうとおとなしくしている。それは、セフィリアにとつて、痴漢行為を容認しろという命令にしかつた。

お
いい乳してるぜ
こりやあ弄り甲斐が
あるつてもんた

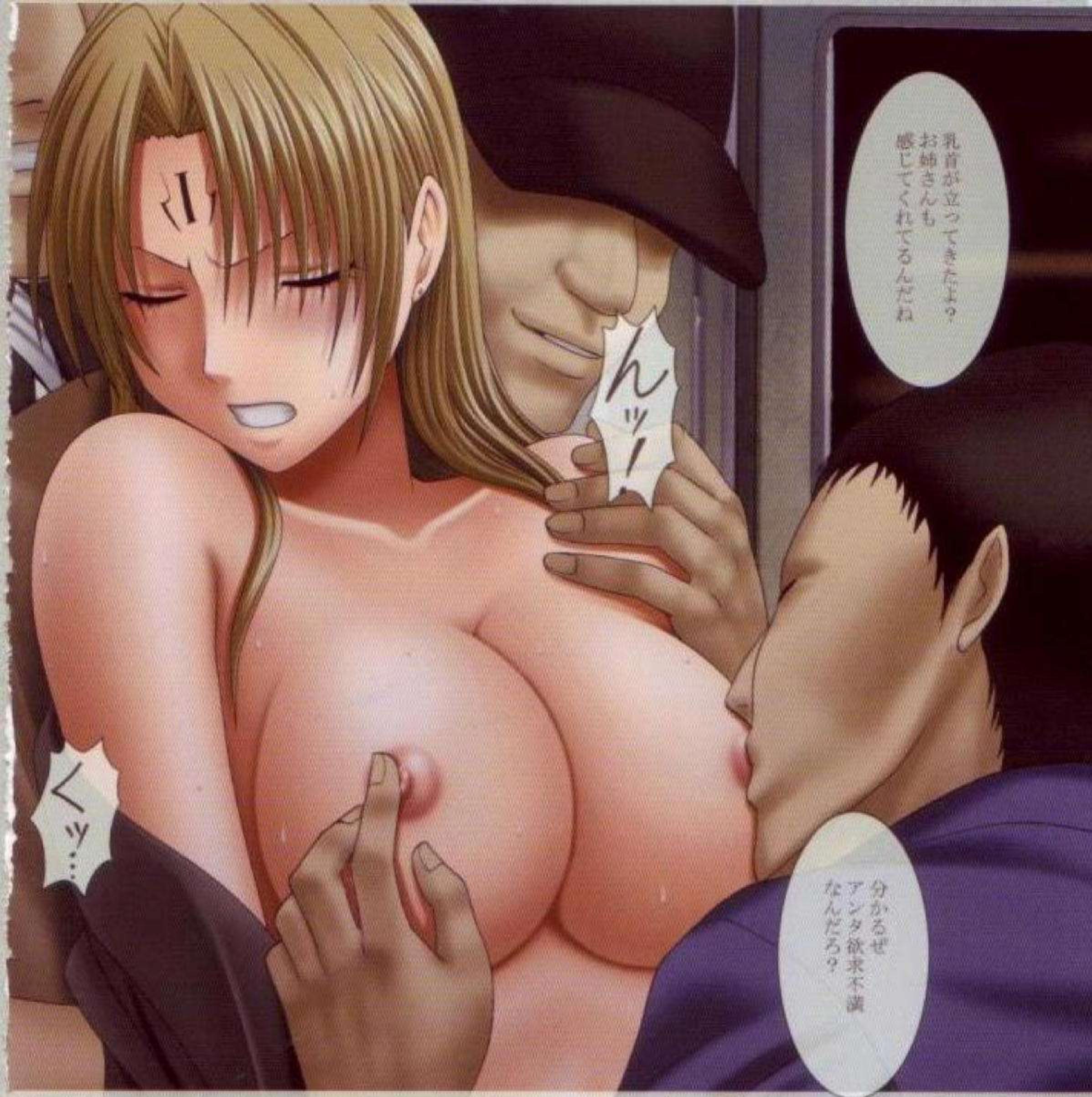
嘘
こんなコトまで
してくるのー？

このままでは
町を勝手されてしまう！



ここまでされて
まだ待機していなくちゃ
いけないの!?

こんなコト
許されるはずがない!



痴漢たちの行為は
衣服を剥ぎ取り、
乳房を直接揉んだり舐めたりし始める。
痴漢たちは複数でセフィリアを囲み、
他の乗客たちに気付かれないようになっていた。
彼らは痴漢行為になれている。
セフィリアもそれは理解した。
そしてふと、この男たちも
敵組織の者なのではないだろ？
と思いつく。
しかし確証はない。
もしそうだつたとしても、
やはり打ち負かすわけにはいかない。
結局、セフィリアはこの痴漢たちの
なすがまだつた。
もはや快感のあえぎを抑えるのにも
神経を使うようになつてきている。
気を抜けば、任務中であることも忘れて、
声を荒げてしまふだろう。
クロノスのナンバー1として、
それは絶対に避けねばならない
醜態だつた。
たとえ陰部を痴漢たちの好きに
蹂躪されたとしても……。



その電車の中は、もう普通の場所ではなかつた。1人の美しい女に多数の男たちが群がる、痴漢行為の楽園。すでにセフィリアはすべての衣服を剥ぎ取られ、身体中をまさぐられていた。しかしながら任務は遂行中。官能に声をあげることもできず、ただ苦悶するだけ。

視線の先には尾行中の敵幹部がいた。自分はまだ失敗していない。それだけを一筋の希望として、セフィリアは屈辱的な行為に耐える。それでももう身体は女の反応を示していた。乳首はそそり立ち、股間は濡れています。いや、内にももに滴つているのが、愛液なのか男の唾液なのかも判別できないほど。

乳首も舐められた。腹に舌を這わされ、尻の割れ目までもすべて舐め尽くされている。その快感たるや、自分の正体さえも見失いそうなほど。だからだろうか。

セフィリアは、敵幹部が下卑た笑いを浮かべたのに気付かなかつた。



任務を遂行しなくては
いけないのに……
くつ、こんなコトで私は……

はあ、
ずつとこの尻に顔を
埋めたいぜ……
このアヌスちたまらねえ

はあー

エロい身体
してやがるぜ……
もう我慢も限界だ

もう濡れ濡れだな
こりやあ
早くふち込んでやらないと

うー!!

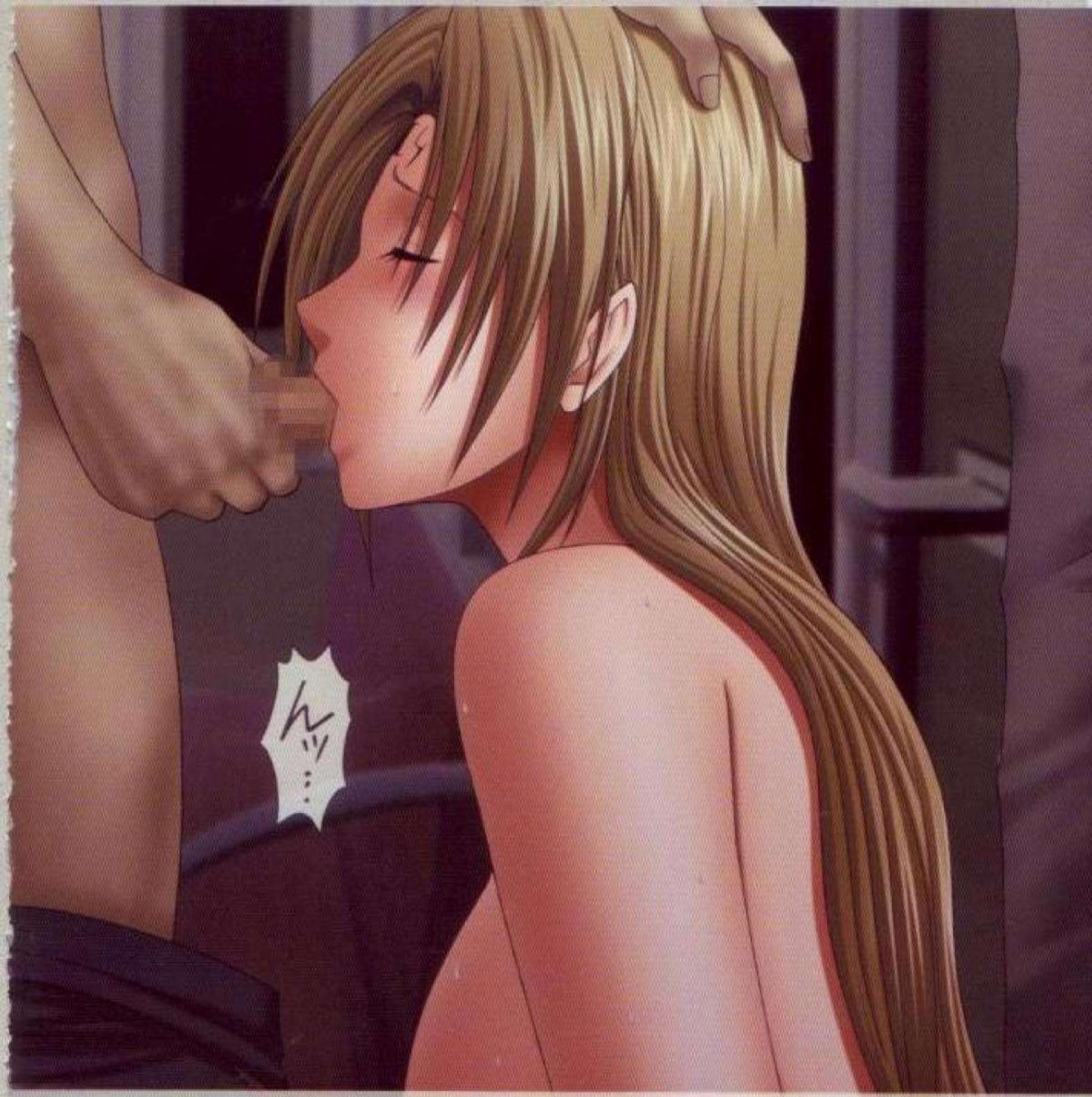
んっ!



ほら
気持ちいいだろう?
犯されて気持ちいいって
言つてみるよ?

公衆の面前で
犯される気分はどうだ?
なあ、最高だろう?

そしてついに来るべき時が来た。
痴漢の1人が、セフィリアの瞳内
奥深くまでを蹂躪したのだ。あまりの快感に悲鳴があがる。
しかし、手際よく押さえ込まれた口から
その声は漏れることができなかつた。
真っ白になる頭。
その時を見計らつたかのように、
長老からの声が届く。
抵抗はするな。任務を遂行せよ。
目立つてはならぬ——
もうすでになんの意味もなさない命令だつた。
そもそも、セフィリアの心に届いていない。
耳の奥に長老の声が響いただけで、耳の奥に長老の声が響いただけで、
その意味を理解する理性も判断力も
持ち合はせてはいなかつたのだ。
むしろ犯されている最中に聞こえてきたことで、
長老に犯されているような錯覚さえしてしまふ。
身悶えするセフィリアを、
痴漢たちは舌なめずりしながら翻り続けた。



数度の絶頂を迎えたセフィリアに、
もはや抵抗する術などなかつた。
もはや任務のことさえ忘れ、
性欲に浸りきついている。男
が突き出してきたペニスを咥えると、
性欲は更に盛り上がりしていく。
塞だけではなく口内までも蹂躪され、
セフィリアは被虐的な快感に溺れていた。
それでも彼女の気高さは失われることなく輝いている。
それがまた痴漢たちの劣情を誘うのか、
次から次へと口内へ射精していった。
もちろん、セフィリアはそれをすべて飲み干さなければならない。
吐き出してしまっては、
目立つてしまつたからだ。
決して精液の味が気に入ったからではない。
そう、自分に言い聞かせていた。
ひとつかけらのフライドが、
セフィリアの意図を支えていた。



しかし、そのブライドさえも

人々にせんと、

痴漢たちが我先にと詰め寄った。

肛門はもちろんのこと、

肛門まで蹂躪されてしまうセフィリア。

すべてが初めての経験であるにも

かわらず、すべてが快感だった。

肛門と直腸を同時に犯される圧迫感がまた、

被虐的な官能を湧き上がらせる。

乱暴に扱われること自体が

快感になっているのか、

セフィリアは自ら求め出す。

もう誰の目も気にしていなかつた。

そして、誰も追つてはいなかつた。

あられもない声をあげるセフィリアを見て、

敵の幹部さえもペニスをそそり立たせた。

二度三度と絶頂し、

その度に意識を飛ばしそうになる。

しかしすぐに新しいペニスが

セフィリアを貫き、その衝撃で目を覚ます。

その繰り返し。

何度もそれを繰り返し、

理性の力ヶうさえも消していく。

最後に、敵の幹部が

セフィリアの直腸内に熱い精をぶちまけた。

その時耳の奥に聞こえてきたのは、

長老の下卑た笑い声だつたのだが……。

もう、セフィリアの意識は、

どこか遠いところへと

飛んでしまっていた。

織姫の告白2

その日あたしは立て続けに痴漢に遭っていた。

ちょっとした用事で、電車を乗り継がなければならない場所へ向かっている最中の出来事。どうもあたしの身体は男の人から好かれるようで、その日に限らず、もう何度となく痴漢には遭っていた。

でもその日の痴漢は、今までに出遭った中でも一番激しい行為だった。

ただ触られるだけという軽いものではなく、胸や陰部を直接愛撫され、何度もイカされた。我を忘れるほどの官能があたしを責め立て、ついには喘いでしまったり……。

喘ぐあたしに気をよくしたのか、男の人たちの行為はどんどんエスカレートしていった。お気に入りだつた服は引き裂かれ、からうじて局部を隠せるだけの布になってしまっている。目的地までは、また別の電車に乗らなければならぬんだけど、このままの姿でいたら、また誰になにをされるか分かつたものではない。

トイレに入つて、まずは乱れた髪を整える。それでも、この惨めな格好が変わるものではなかった。一度この駅で降りて、服を買いに行こう。

そう決意してきびすを返したその時、見知らぬ女性があたしに紙袋を差し出してきた。

良かったら、これをお貸ししますよ——

あたしの格好を見て状況を察してくれたのだろうか。

紙袋の中身は服だつた。シンプルなキャミソールとブリーツのミニスカート。

それと、黒のショーツ。

これでまともな格好ができる。驚きよりも、まず安堵がわき上がつた。

そして、ホンとしたあたしを見て女性が苦笑した。

一瞬、なにか含みのあるような笑いに思えたが、それは気のせいだろう。

この女性があたしに含みを持つ理由などない。再度お詫びを言って、お別れした。





恐る恐る電車に乗り込む。
しかし先ほどまでのような混雑はなく、
人影はまばらにしかない。

あたしは安堵して、ボックス席に座り込んだ。
車窓から見える風景に、ようやく心が休まつてくる。
それでもまだ身体の奥の火照りは冷めていないのか、
やけに子宮がうずいているような気がしてならない。
乗客が少ないせいもあつか、あたしはつい居心地悪く
モゾモゾとしまつていた。

ごわごわとしたショーツがまた座り心地を

悪くしているのだろう。

まるでなにかをアソコに押し当てられて
いるかのような感覚に、

いい身をよじつてしまつた。

しかしこと気付いて、周囲に目を配る。

人目につきやすい電車内で、

あまり派手に身をよじつてばかりもいられない。
人の目がないことを確認して安堵するも、

やはり居心地の悪さは変わらなかつた。

そこはかとない不安と、得体のしれない火照りが、
深いため息となつてあらわれる。

その中にまで熱いものを感じたあたしは、
それを否定するように強く首を振つた。

もういい。目的地まで目を閉じて休んでいいよう。
無理に目を閉じ、肩の力を抜いたその瞬間

「えつー？」

突然、クリトリスが痺れた。
思わず声をあげ、股間に手を伸ばす。
すると何故だろう。ショーツの硬い部分が、小刻みな振動を始めていた。

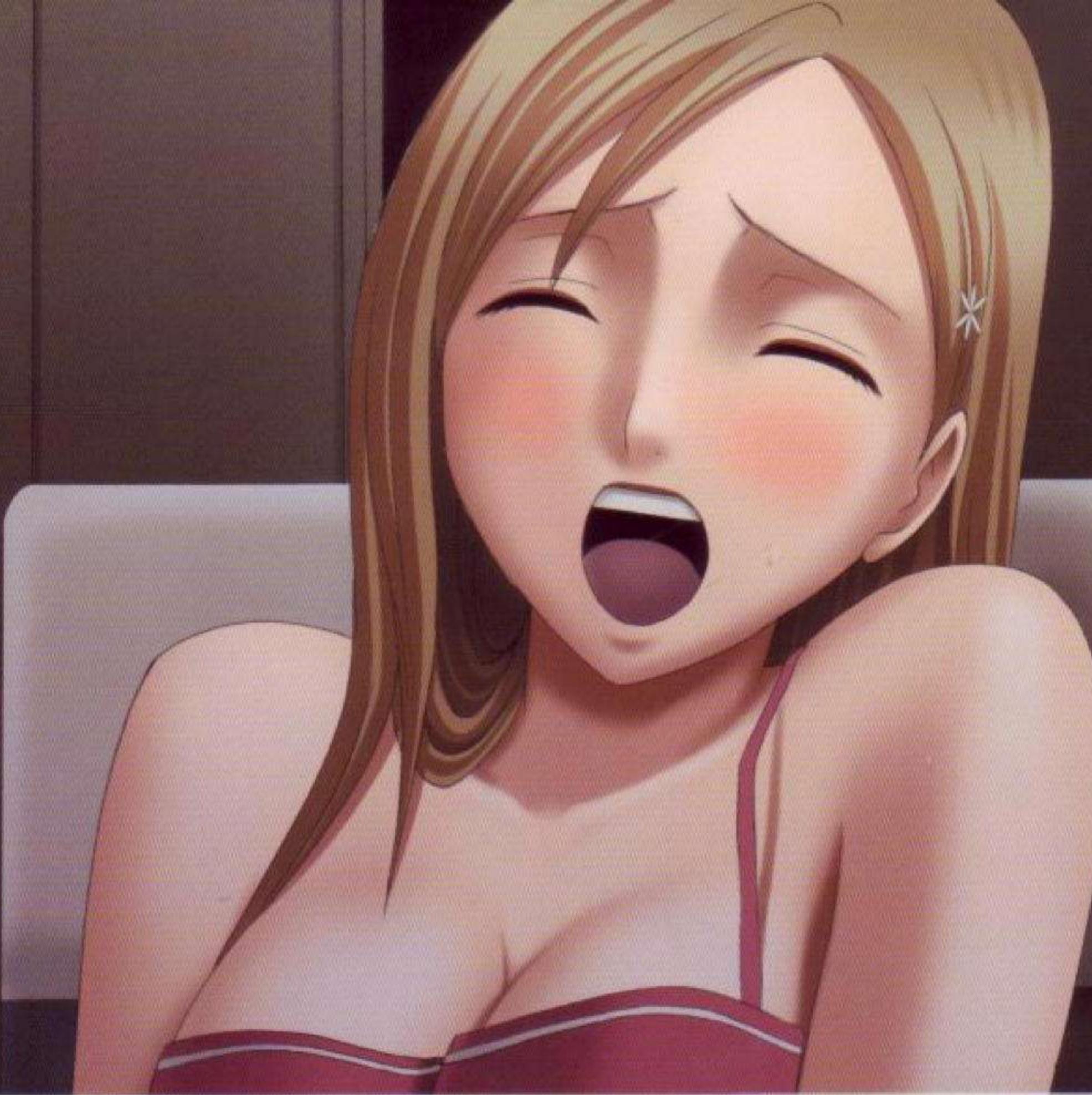
（これは何？ いつたいなんなのー？）

なにが起きたのか分からず、ただ自問自答を繰り返す。
ちょうどクリトリスの部分にある振動の源。それが思考を遮っていた。

「ウウウウウ」と、低い振動音が響く。
最初、それは弱い振動だつた。少し震えては止まり、またしばらくして震え出す。
振動する度に歯を食いしばり、息を止めた。
止まつたときに息をつき、安堵する。

しかしすぐにまた始まる振動に息を呑み、声が出てしまわないように唇を固めた。





振動の間隔はその都度まばらで、30秒くらいの間があつたと思ったら、次は1秒と待たずに再開した。息継ぎの間隔が狂わされ、徐々に肩で息をし始めるあたし。それでもまだ、声が漏れてはいまいかと考えることができて、いるだけマシだつた。

そして、少し長い停止。30秒を超えたかと思つて、また身構える。しかし次の振動は来ない。

終わつたのだろうか。なんの根拠もなくそう思つた。そもそも、何故こんなことが始まつたのかさえ分からず、いたあたしの考えなど、「彼ら」にはお見通しだつたらしい。

息を吐き、肩の力を抜き、股間から手を放した瞬間だった。

「ツツツ……」

これまでになく強い振動がクリトリスを攻め立てた。ビリビリとした刺激が脳天を突き刺す。目の奥がチカチカするのは、あまりの快感に理性が飛びそうだつたからか。

(恥目、疼れる！　なんでこんなに気持ちいいの！？)

「いつたい、これは：なんなの！？」

いまだなにが起きているのか理解できず、ただ混乱するばかり。

そしてクリトリスから駆け上つてくる快感に身を激しく震わせた。

官能に抗うこともできず、次第に喘ぎ始めてしまう。ここがどこなのかも忘れかけ、波のように寄せては返す振動に、あたしの心も揺れ始めていた。やはり振動には間隔があった。

その間隔に、今度は強弱も加わる。

何段階がある振動の強弱、徐々に身体も慣れ始めてしまったのか、弱い振動が来たときには、つい物足りなさを感じてしまう。しかし、強い振動には息を呑む。意識して口を閉じなければ、どれほど高く喘いでしまうか分からない。本当なら今すぐにでもこの振動を止めるすべを考えなければならないはずなのに、そんなこと思いつきもせずに、官能に掻られる。



このままじゃいけない。
この状態は、いつ誰が来るかもしれない電車内で、
公開オナニーをしているようなものだつた。
もちろん、ショーツがいきなり振動し始めたんです。
などという言い訳がきくはずもない。
その快感に溺れそうになつてしまつたのは確かなのだし。
（このままじゃ駄目……なんとかしなくちゃ）

問題は、あたしをもてあそぶこのショーツだった。
しかし車内で脱ぐワケにもいかない。

他の乗客のいない今なら脱げるかもしれないが、

脱いでしまつたら
すでに溢れ出している愛液をせき止めるものが
なくなつてしまふのも問題

もつとも、このままこのショーツをはき続けている方が、
よりたくさん愛液を溢れさせるのも明白だつた。
（ああ……脱ぎたい。でも脱げない……）

あたし、どうしたらいいの？

悩んでいる間にも、振動はあたしの官能を昂ぶらせていた。
時に強く、時に甘く。
焦らすようになり、応えてくれたり。
気を張つていなければ、もう何度か
イッてしまつていただろう。

それほどまでに、あたしの体はクリトリスの責めに弱い。
このショーツはまるで、
あたしの好みを知っているかのようだつた。
ここに来てようやく、ショーツの異常性に目がいつた。
先ほどの女性は、このショーツにこういう機能があることを知つていて渡してきたのだろうか。
であれば、何故そんなことをしてきたのか。

答えは簡単。
あの女性は、このローターが仕込まれた下着を
あたしに穿かせる役目を持った。
痴漢たちの仲間だつた



今更あの女性に対して文句を言つても仕方がない。
それよりも今は、この官能をどうするべきなのか
考えなければならない。

しかし結局脱ぐことができず、あたしはただ
いかないようにと耐えるだけ。
そのことばかりに気を取られていたせいで、
ボックス席に男性が入ってきたことに気付かなかつた。

「え……？」

いきなり、膝が押し広げられた。
目の前には、おとなしそうな顔をした男性が1人。
そして気付けば、横にももう1人別の男性が座つていた。
(喘いでたの聞かれた? スカートの中に
手を突っ込んでたの、見られちゃつた!?)

一気に血の気が引いた。

羞恥と困惑に身体が震える。

あたしは開かれた脚を閉じることも忘れ、
男の人たちを交互に見つめるしかなかつた。
その人たちが痴漢なのだと気付いたのは、
横の人が太ももに手を伸ばしてきてからだつた。
むにゅりと揉み込んだかと思うと、
膝から付け根までさすり出す。

「あ、あの……？」

「しー。静かに」

前の人気が、唇の前で人差し指を立てた。
その手に小さなスイッチを持っている。

男の人はにつこりと笑いながらそのスイッチを入れた。

「——ツツ——? ?」

指を動かす度に、クリトリスへの振動が強弱する。
男の人はや止めることはせず、ただ強くしたり
弱くしたりの繰り返し。
これでようやく理解した。
この卑猥なショーツをあたしにはさせたのは、
この痴漢たちだったのだと。



痴漢たちを目の前にして、
無防備な胸を晒しておくわけにはいかない。

その中心には、すでに濡れ濡れになつていてる秘部もある。
あたしの生意が下を向いたのに気付いたのか、
男の人たちは素早くキャミソールをまくり上げた。

「そんなっ！」

自分の失態に、つい声が出てしまう。
しかし痴漢たちは声をあげることもなく、

下卑た笑いを漏らすことなく、

まるで恋人にするかのように胸を愛撫し始めた。

「んっ……だ、駄目、やめてください……ああ」

愛撫は優しく、しかし押さえる力は強く、

あたしは早くも、痴漢たちのいいように觸られ始めていた。

胸を揉みしだきながら、息を呑む痴漢たち、

寡黙だったその口から感嘆の言葉が漏れる。

「すごく大きいですね……揉みこたえも最高ですよ」

「やめてください。そ、そんなこと言わないで……

ああ、あんっ、いや！」

耳元でささやかれた声に、乳首が反応してしまう。

キュッとすぼまり、固くそそり立つ。

男の人たちはそれを嬉しそうにつまんで、

またゴクリと息を呑んだ。

その音が何故かひどく卑猥に聞こえて、

あたしの乳首は更に高く勃ち上がる。

駄目、そんな……こんなに感じたりしたら、

この人たちの思うつぼに……）

両の乳首を、別々の男性につままれていた。

しかもしつかりと感じさせてくる。

ただ乳首を愛撫されているだけなのに、

身体全体に痺れが走った。

ただ、今もクリトリスへの振動は続いている。

ククリトリスからの果てしない快感。
そして乳首からの刺激、乳房を揉み込まれる官能のうねり、
それすべてが、あたしをどこか遠いところに運んでいく。



男性たちの愛撫は始終丁寧で、これまでに遭った痴漢たちとは少し違う感じがしていた。

それでももちろん、痴漢は痴漢。

あたしはなんとかやめてもらおうと

必死の抵抗を見せる。

しかし彼らも慣れたもので、あたしに痛みを

感じさせることなく押さえつけ、

快感だけを与えてくる。

しばらく揉み込んでいた乳房に、

今度は顔を寄せてきた

乳首が、ねつとりとした感触に包まれる。

横の人が、そそり立った乳首に吸い付いたのだ。

「ひあっ！ ひやっ、や、やめっ……ンンッ！」

くすぐった……あああああ！」

最初は強く吸い付き、甘噛みしてきた。

すぐにそれを癒すかのように舌先で転がし、

すぐぐるようになぶり始める。

そしてまた吸い付いて、じっくりと舐め転がした。

（くすぐったい……でも、すごく気持ちいい。

この人、なんでこんなに上手なの！？）

「どうですか？ そろそろイッてしまいそうでしょう？」

（違つ……あたし、こんなコトされて、

いつたりなんか、しな……んあああ

また、クリトリスに振動の波が来た。

高くて響きそうになる嗜きをなんとか

のど元で押しとどめる。

隣のボックス席には誰もいないが、

後ろのボックスに誰かいないとも限らない。

痴漢行為からは助けて欲しいが、今のこんな姿を

見られたくないというジレンマが、あたしから声を奪つていった。



そんなあたしを嘲笑うかのよう、いきなり頭の上から手が降りてくる。
「待ちくたびれちゃったよ。そろそろ俺にも参加させてくれないか？」

その言葉や、他の男性たちの態度から、

背後の男性がただの飛び入り参加者ではなく痴漢仲間なのだと教えてくれる
伸びてきた手は容赦なく乳房を揉みしだく。
隣の人より少し強引で乱暴だったが、それでも前の電車の痴漢たちと比べれば紳士的とさえ言えた。
乳首をくすぐるようにしたり、ふにふにと可愛らしく揉み込む愛撫に、

あたしはすぐ官能を湧き上がらせる。

「ああ、いいね、その顔 とても淫らで色っぽいよ」
カシヤツ——携帯カメラのシャッター音で、

急激に理性がよみがえった。

先ほどまでスイッチを握っていた手が、

携帯カメラに持ち替えていた。

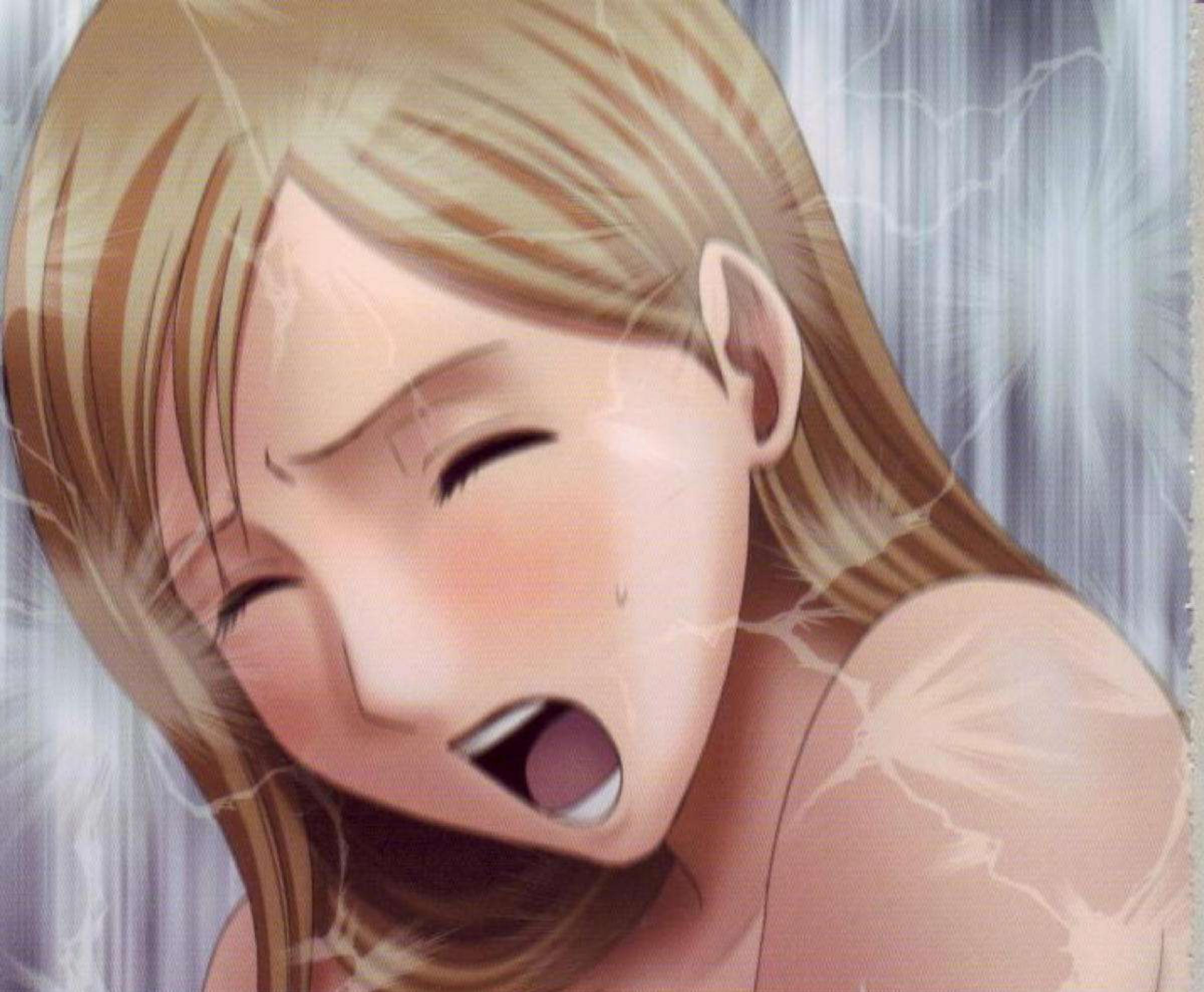
そして剥き出され、男性たちの手で揉み込まれている

(二)なんなど二写真に撮られたら、恥ずかしくて死んじゃう！)

カメラの男性は、脚を押し広げて股間まで写そうと身を乗り出す。
他の男性たちも呼応して、あたしの身体を開かせていく。
触りまくられ、感じさせられたあげく、写真まで撮られる恥辱に、
あたしはなけなしの力で抵抗した。
でも男性3人の力にかなうはずもない。
もう、何十枚撮られたか分からなくなる頃には、
抵抗する意欲もだいぶ薄れていた。

「お、お願ひ……もう……」

「どうしたんですか？ もういかせて欲しくなりましたか？」
もうやめてください。そう言うはずだつた唇は、
熱氣のこもった吐息しか吐き出さなかつた。
それを好機と見て取つたのか、
1人の手があたしの股間へと潜り込んだ。



「ああ、つつ、強すぎつ……んあ、ひやつ——ツツ！」

男性の手がショーツに触れた。振動するその部分が、クリトリスに強く押し当てられる。

全身の性感帯を巡つて脳天を直撃した。

「駄目っ、やつ、やめつ……いく、

そんなことしたら、イッちゃうつ！」

もう、恥も外聞もなく声があがる。

車両内に人がいれば、喘ぎまで聞こえていただろう。

あたしはもうずいぶんと理性を奪われ、代わりに官能を与えられていた。

絶え間なくクリトリスを痺れさせられ、

乳首からは甘い刺激と激しい快感が与えられた。

耳元で卑猥な言葉をささやかれ、全身をくまなく撫でられる。

（ああ、来る……来ちゃう！）

駄目なのに……こんなの、ぜつたい駄目なのにっ！）

押し当てられたショーツの中から、

愛液が溢れ出したのが分かった。

それは太ももやお尻を濡らし、まるでおもらしのような居心地の悪さを感じさせる。

ムズムズとした感覺。それから逃れるように腰を浮かせると、

男性の指がまた強く潜り込んでくる。

（指……いい。気持ちいい……）

もう、おかしくなつて……つ！）あと少しだ。そう思った。

子宮に、ズン、と衝撃が走る。

次の瞬間、まるで水風船が割れたかのよう衝撃があつて、愛液が水のようにはじけ飛んだ。





服、締め付けられて苦しいでしよう？
誰かがそう言つたのを覚えてる。

でも、次に気がついたとき、
あたしは一糸まとわぬ姿になつていた。

腰臙とした意識であつても、もちろん恥ずかしい。

「安心していいんだよ。コレはほら、
ちゃんとキミの気持ちいいところに当てていてあげる」

（あたし……は、裸にされてる。
しかも、痴漢されて、また……？）

ショーツから親指大の橢円球を取り出し、
剥き出しになつたクリトリスに当てる。
その球から、先ほどまでと同じ振動が与えられた。
ローターと呼ばれるそれを愛おしげに
眺めている途中から、少しずつ理性が戻つてくる。

カーッと湧き上がる羞恥に身をよじる。
しかしすでに、男の人たちの手があたしの身体を
まさぐつっていた。

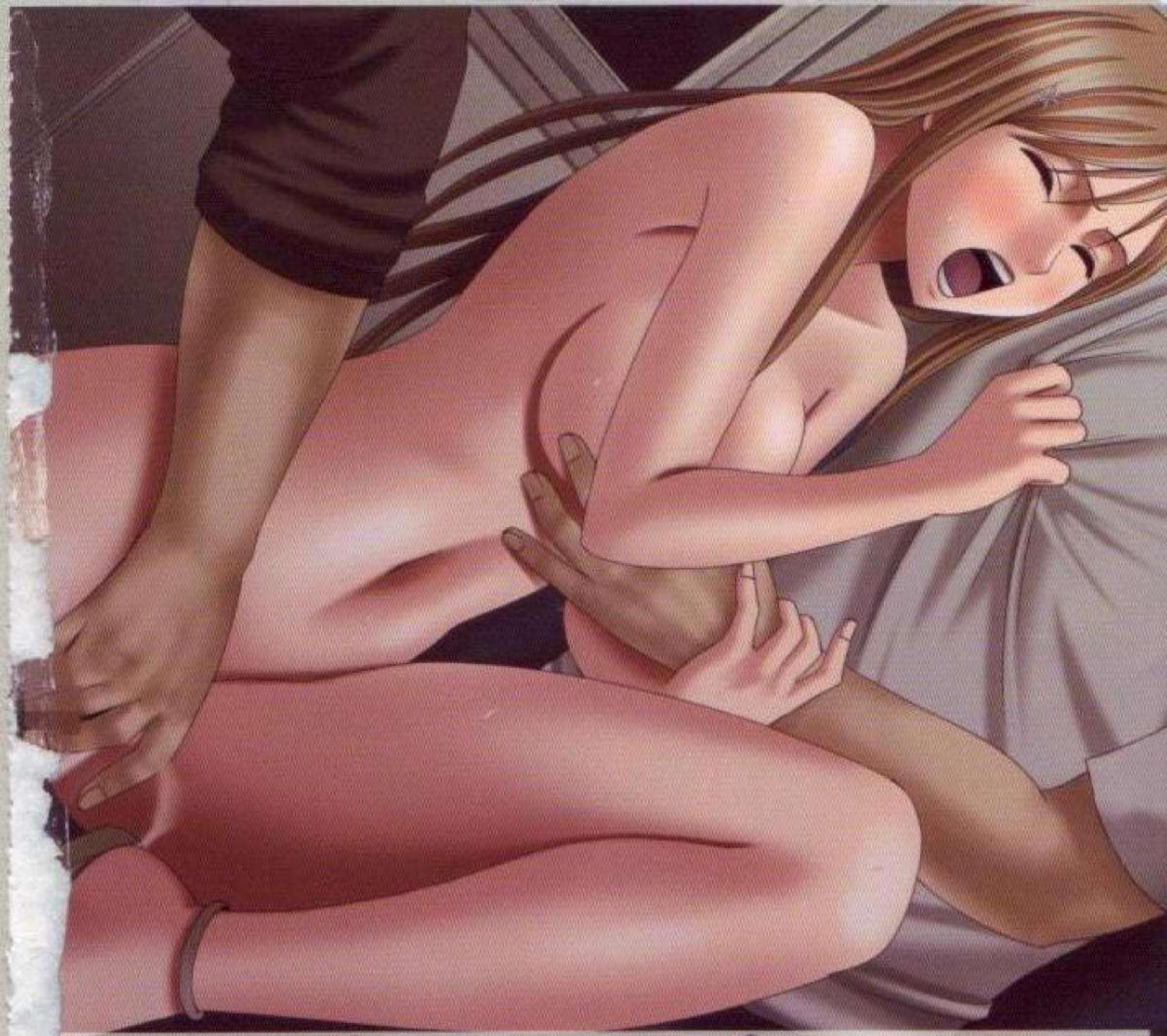
秘部を隠すなど言語道断とばかりに身体を開かされ、
ローターでクリトリスを刺激される。
そして男性の指が、隠すべきだった場所へと侵入した。

「んあっ……いや。そこは駄目……
ああ、本当に駄目なの……」

指先で陰唇に触れる。何度か軽く弾くと、
びちゃびちゃと音をたてた。

「あーあ、濡れすぎだよ？
なんていやらしい子なんだろうね」

苦笑混じりに言う声に、羞恥よりも官能を覚えてしまう。
いやらしくなんてないと言いたいのに、
あたしの口からは舌なめりせんばかりの
喘ぎが漏れるだけだつた。



身体と心が剥離していく。心ではまだなんとか抵抗しなければと思つてゐるのに身体はもう彼らに差し出しているような状態だった。胸も揉まれ、もてあそばれる。くすぐったさの中に確かな快感を見つけ、息を呑みつつ堪能する。

しかしすぐにハツとなつて、男性の手を押しのけるいや、押しのけようとするが、男性はまるで悪戯な子猫をあやすように、たやすくあたしを押さえ込んだ

（力が出ない……さつきイっちゃつたから？
でも、このままじゃ、また……）

女陰全体を手のひらで包み、揉み込まれた。その手の中にはもちろんローターも入っている。

ローターはクリトリスのみならず、

陰唇の谷間へも潜り込んでいた。まるでオッパイを揉むように女陰の土手を揉まれると、溢れ出した愛液でネチャネチャと音が漏れた。その音の間隔がまた淫らで、まるで全身が得体の知れぬ粘液に包まれているような気分をもたらす。

そして淫らなのは自分なのだと、この愛液はすべて自分が垂れ流しているものなのだと理解してしまうと、余計に官能が昂ぶつていった。

（あたし、痴漢されて感じてる……
犯されて、感じちゃってるんだ……）

すがりつく相手さえ痴漢なのだ。
あたしの理性は、もうすいぶんと遠くへと行つてしまっていた。



もう、ここが電車内であると
いうことさえ忘れそうになつて
いた。まるで正常位のような体勢にされ、
身体をあちこちから触られる。
胸やお腹などの表面ばかりではない。
男性の指はすでに、あたしの体内にまで
潜り込んでいた。

「そこっ、は……ああ、いや！
指、入れないで……んんんっつ！！」

ぬるり、と難なく潜り込んでくる。
それは、あたしの愛液が
出過ぎているせいだろう。

男の人も慣れたもので、指全体に
たっぷりと愛液をまぶしてから挿入してくれる。

「おま○この中、熱々だね。
すぐくヒクついて、指を呑み込んでいくよ」
「嘘つ。ウソですそんな……」
「ああ、いや。そんなに突っ込まないで……」

膣内を押し広げられていくのが分かつた。
男性の指が膣壁を開きながら潜り込んでくる。
初めての圧迫感と異物感が、
あたしを困惑させる。
それは不快感でもあり、快感でもあつたからだ。
しかし快感の方が強く勝っているのは、
クリトリスの当てられている。
ローターのせいだろう。
絶え間なく続く振動が官能を高め、
初めての異物感さえも快感と誤認させる。

いや、もうそこには快感しかなかつたのかもしれない。

男性が、膣内で指を動かし始めた。

オッパイを撫でると同じような感じで、膣壁を甘く擦りつける。

ヌルヌルというかザラザラというか、言いようのない感覺が膣壁から伝わる。

膣内のほんの一部を撫でられて、全身を撫でられている以上の快感が生まれた。

もうそこに不快感はなかつた。快感だけしかなかつた。

ただ、それを認めたくない気持ちだけは、まだ心の奥底に残っている。

快感しかないと考へるワケにはいかないと、最後の理性が悲鳴をあげていたのだ。

でも、それももう終わりらしい。

自分ではもうなにを口走つていたのか分からぬが、気がつけば口を押さえ込まれていた。
からうじて息ができるだけの拘束。その圧迫感が強姦されているのだという意識を生み、
被虐的な快感さえ生み出してあたしを高めていく。

「ああ、またイくんだね？」 ほら、おま○この中がすごくうねつてるよ」

自分でも分かつていて、男性の指が先ほどより大きく感じているのは、あたしの膣が縮まつているからだ。
徐々に全身が硬直していき、身体も心も張り詰めしていく。

水風船に必要以上の水を入れて、どんどん膨らませていって。

あとは、破裂するだけ。

（また、来る。さつきより大きいの、来る……来ちゃうつ、来ちゃう……）

叫びたかった。でもその声は男性の押さえ込まれて自分の中に返ってくる。

それが体内でハウリングして、更に水かさを高めていく。

（もう駄目。もうゼッたい駄目。あたし、もうどうなつてもいい。このままイきたい。イカされたい。弾けちやいたいっ……）

乳首が痛いほどつねり上げられた。でも、それは快感でしかなかつた。

クリトリスへの振動も、もうすつと最強のスイッチが入ったまま。

そして、

膣を侵す男性の指が、不思議な場所を探り当てた。

「あ」

そこは、クリトリスの裏側あたりだろうか。

指先がその壁に触れた途端、まるで針に刺されたかのような感覺があつた。

「んんんんんんんんんんんん……」

パンパンに膨らんだ水風船が割れる。

甲高い音を立てて、中の水はすべて弾け飛ぶ。

それは、今までに感じたことのない、最高峰の絶頂感だった。





そして全身の感覚が失われた。
まるで深い眠りに落ちているかのよう。
ここが現実なのか夢の世界なのかの区別さえつかず、
あたしはただひたすらに喘いでいた

「す」かつたね……こんな激しい絶頂、見たことないよ」
男性が優しげに語りかけてくる。
それさえも夢うつて聞いていた。

「ねえ、もうこのままじゃ終わらないでしょ？」
服を返してあけるかい。
俺たちと一緒にもつといといとーるに行かない？」

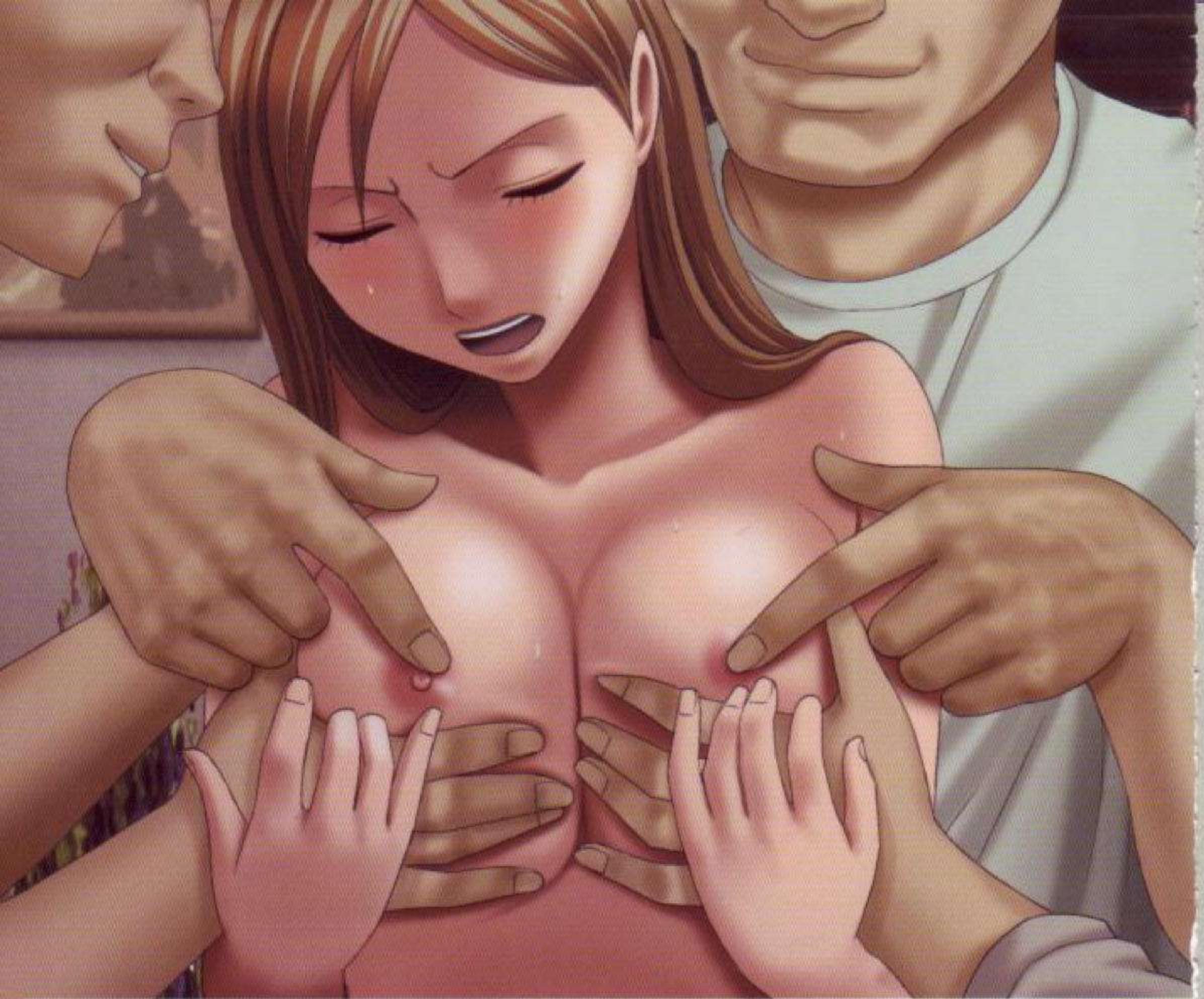
いいところ？ 電車の中でもーーーまでされて、
これ以上どこでなにをされてしまうというのか
躊躇としつつも、首を振る

「それじゃあ、ずっとーーーにして欲しい？
終点に着くまでまだまだあるし……
俺たち、終点まで行つたらそのまま帰っちゃうよ？
もちろん、貸した服は持つて帰っちゃうし」

それは困る。あんな小さな服でも、
引き裂かれたものよりずっとマシだ。

「じゃあ、いいよね？ 大丈夫だよ……
最後まではしないようにしてあげる」

「ほら、ーーのままーーにいたら、
もつと恥ずかしいーとになっちゃうよ？」



電車を降りてすぐの所にホテルはあった。部屋に入ると一も二もなく服を脱がされる。そしてまた、全員で乳房をまさぐり始めた。

(あれ? あたし、なんでこんな所にいるんだろう?....?)

男性たちに流されるままついてきてしまったことによくやく気付く。しかし、もうなにもかもが遅かった。電車内なら痴漢行為の被害者だったが、ホテルに一緒に入ってしまえばすべてに同意したことになってしまう。そんなことにさえ気付かなかつたのは、正常な判断力をなくしていたからだ。

(いけない……逃げないと! こんなところにいたら、今度こそなにをされるか分からぬ!)

電車の中できえ、何度もイカされてしまつたのだ。ホテルになどいたら、それこそ彼らの好き放題にされてしまうに違ひない。

「やっぱり駄目です……は、放してください!」「なにを言つてるんですか? ついてきたのはキミの方じゃないですか」

抵抗しようとしても、上手く力をいなされてしまつてどうにもならない。それどころかこちらの動きを見きつて、無防備になつたところを撫で回してくる。しつかりとした連携も取れていて、細腕のあたし1人ではもうどうしようもないほどに包囲され、捕らえられているのだった。

「それじゃあ、気持ちよくしてあげよつか……ここならもう、いくら声をあげたっていいからね」
そして、柔らかなベッドに押し倒された。



そのまま押さえ込まれ、
また正常位のような格好に身体を開かれる。
背後から腕を掴まれて動きを封じられてすぐ、
開かれた股間に別の男性が顔を埋めた。

「ひやっ！ やめっ、そんなトコ舐めちや、
んあああああああああ！」

先ほどまでローターと指でさんざん愛撫された
ピンクの谷間に、男性の舌が伸びる
いかされたばかりで剥き出しになつたままの肉芽を
一舐めされただけで、体の芯が熱くなるのを感じてしまった。

「だ、駄目。やめてください、ひあっ！ あたしもう、
こんなのイヤです。帰させてください……んつく、ああああ」

クリトリスはもちろん、陰唇の谷間に潜り込み、尿道口を、
そして膣口を。そして膣へと舌を突き込み、激しく動かす。
ほんの浅い部分までしか入っていないはずの舌に子宮口まで
舐められているような気がして、あたしは甲高い悲鳴をあげた。

「おつと、そんな暴れるなつて……オッパイが
ふるんふるん震えるのを見るのは楽しいけどな」

もがくことさえ、彼らにとつては楽しいらしい。
ならば、あたしはもうどうしようもないんじやないか。
悲観がよぎり、動きを止める。するとまた激しい舌の愛撫が始まった。

「あふっ、くつ……ンン！ くつ、そこばっかり、
駄目え……ツツ！」

先ほどから、クリトリスが弱いことはもう見抜かれていた。
男性たちは、隙あらばクリトリスを愛撫し、性的に攻撃していく。
そしてあたしは、その攻撃にたやすく負けてしまうのだ。

「キミは本当にクリトリスが好きなんだね。それなら、
もつといいものをあげるよ」



「——ツツツ……！」

はあッ！

取り出された道具はふたつ。あたしを拘束するための手錠と、こけしのような見た目の……あれは、電気マッサージ器だろうか。そんなもので一体なにをする気なのか。答えはすぐに分かった。手錠され、更に押さえ込まれたあたしの股間に、マッサージの部分が押し当てられた。

「——ツツツ……！」

その振動は、ローターの比ではなかった。激しそぎる一撃目に、瞬時に高みへと上らされる。「おや、触れただけで絶頂ですか？」すこい効き目ですね」ちよつと触れただけで、いや、触れなくてもその低い振動音だけで絶頂の波が押し寄せてくる。触れられればもう、簡単に頂点へと打ち寄せた。

「あうっ、んうっ、だつ、駄目！」それ駄目っ！

おかしくなつちゃうっ、ん！」

これはもう、凶器に近かつた。

触れられれば数秒ともたずに絶頂させられる。その度に愛液を噴き出し、身体中がケイレンするのだ。こんなコトを続けられたら、すぐにおかしくなつてしまふ。しかもあたしは、おかくなりたいと言わんばかりに腰を突き出していた。

まるで麻薬のような常用性。何度もイきたい。何度もアクメを叫びたい。

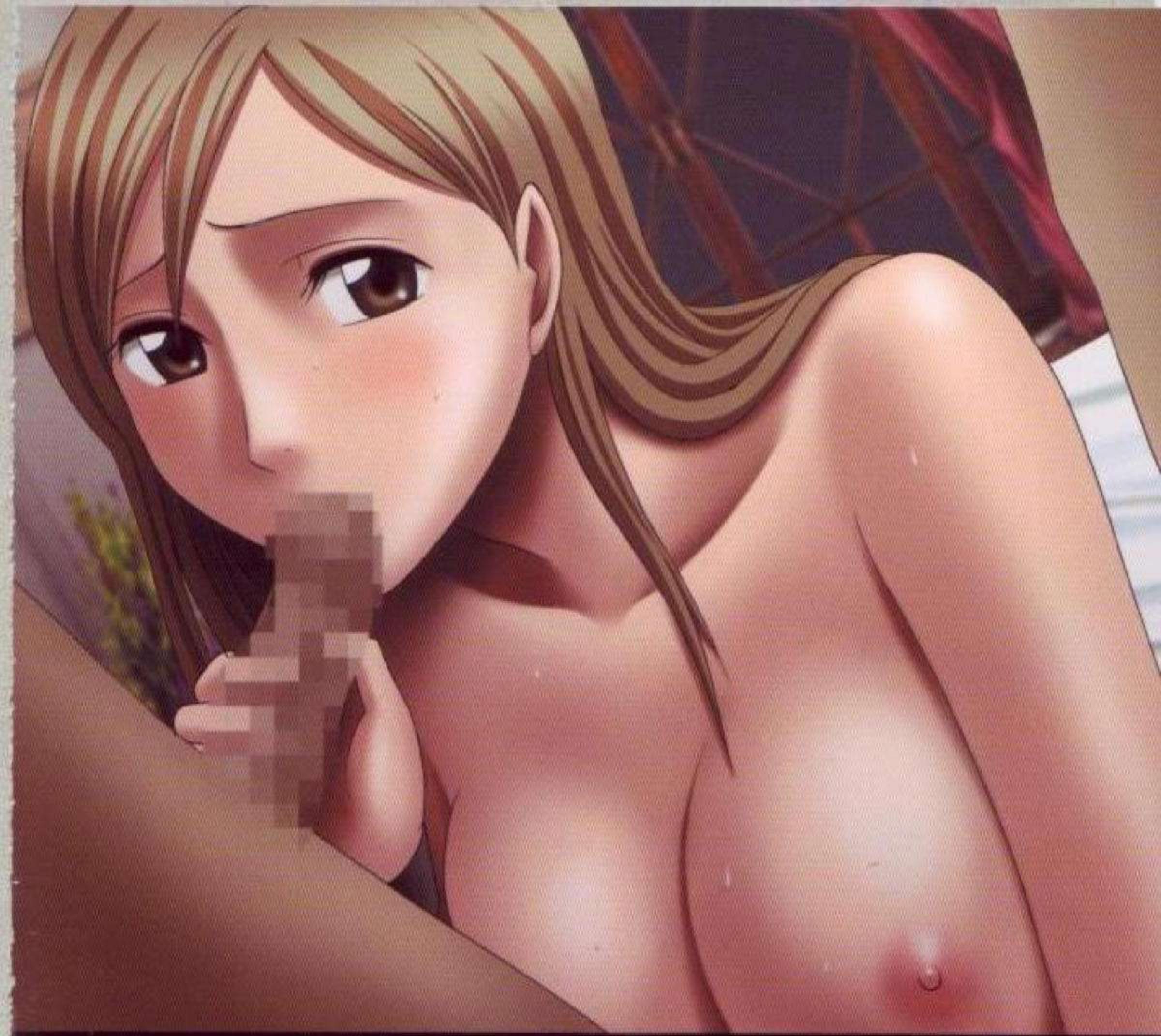
でも、こんなコトはおかしい、やめなければならぬと心の奥底でなにかが叫ぶ。

「し、死んじやう……あたし、も……これ以上、

いつたら……お、おかしく、なつちゃ……

ふあ、ああああああっつ！！」

それならばマッサージ器を抱えた男性が、悪魔の取引を申し出てきた。



あのままマッサージ器でイカされつづけるか、
それともフェラチオでの奉仕をするか
その二者択一に、

あたしはフェラチオを選ぶしかなかつた。
選ばなければ、

本当におかしくなつていたかもしない。
男性のペニスを口に含んだ今でもなお、

クリトリスの痺れは取れないままだつた。

「ああ、 そうそう。 とても上手ですね」

満足げな吐息をつく男性。

ほんのりとした苦み。 それは男性の味とも言える。

初めて味わうそれに

あたしは少なからず困惑していた。

慣れないフェラには、 男性からの的確な指示が入つた。
その通りにすると、
口の中にまた新しい苦みが広がる。

「ちゅ～ふ、 ちゅ、 じゅぶつ……んん、 ちゅるる」

射精されることはなく、
2人目3人目のペニスもしやぶつた。

そしてクリトリスの痺れが取れ始めてきた頃、
最初の男性がぼそりと呟いた。

「……そろそろ、 我慢も限界といったところですかね」



「ま、待って！ やめてくださいっ！ 約束が違いますっ！」

再度ベッドに押し倒された。しかし、今度近づけてきたのは顔ではなく、つい今しがたしやぶつていた男根。

「いやですっ、イヤ！ 挿入だけはしないでっ、犯さないでえっ！」

分かっていたはずだった。電車内であそこまでされてからホテルに連れ込まれれば、最後の官能が待っているのだということくらい。でも、認めたくないなかつた。認めるわけにはいかなかつた。あたしの処女は、大好きな人にあげたいと思っていたから。

「キミもこうされたいって思つてついてきたんでしよう？ だつたら、その望みは叶えてあげないと、ねっ！」

「ツツ！！」

前戯はもう十分すぎた。たっぷりと潤ったままの膣は、男性の凶器を難なく根本まで受け入れてしまつた。一気に処女膜を突き破り、亀頭が子宮口をノックする。その衝撃に脳天を突かれ、あたしは破瓜のその瞬間に絶頂した。

「ああああ、…くううつっ！」

順番待ちをしている男性たちからさえ感嘆の吐息が漏れた。挿入している男性は、更に深い官能の息を噴き出す。そして、すぐさま容赦ない抽送が始まつた。

粘膜が絡み合う音、肉がぶつかり合う音が室内に響き渡る。そしてその衝撃と快感が、膣から全身へと響き伝わつた。



「はあ、はあ、はあ、駄目、あたしの……んああ」

絶望感が心を支配する。それなのに、
身体は快感に震えていた。
いてもたつてもいられなくなつたのか、
別の男性が乳房に襲いかかる。

「い、いやあ……放して！　もう、
これ以上犯さないで……んぐ、くつーはあ、はあ」
「こんなに締め付けて来て……」

「素直に悦んだらどうですか？」
「ち、違うの。身体は、こんな身体は、
あたしのじやない……んつく、う、う」

違うハズがない。そんなことは分かつていてる。
それでも、性の悦びに溺れるだけの身体など、
自分のものだと認めたくはない。
犯されて悦んでいるなどと、認めたくはないのだ。

「乳首もこれ以上ないくらいに勃起してるよ？
俺のペニスよりも大きいくらいだ」
「うそ……うそです。あたしは、そんな……
ンあつ、きやふ、ちつ、乳首つまんじゃ駄目え！」

今の身体は、ほんの少しの刺激でさえ
すべて快感にしてしまう。

普段の感覚よりも鋭くなっているのか、
肌についたホコリにさえもねぶられて
いるような気がしていまう。

つまり、乳首などつままれたら、それはもう
「ああ、駄目っ！　いく、乳首でイっちゃ……
ああああああああああああ！」

頭の中がスパークした。全身が電気ショックを
受けたかのように跳ね上がり、男性の絶頂をも導く
座内に熱いものを感じたが、理性が飛びかけている
あたしには、それがなんのかは分からなかつた。

刺激のすべてが快感になってしまっては、
もはや拷問に近い氣がする。

常軌を逸した快感が、ついに心の奥まで蝕んでいく。

「も、ため……これ以上、されたら、

お、おかしく……んう、もう、助けて……」

そんな懇願が叶えられるはずもない。

気付けば別の男性がのしかかっており、

激しい抽送が行われていた。

押し込む度に前の男が體内に噴き出した精液が溢れ出す。
ブジュップブジュップと淫らな音が出るが、

それが白濁液からもたらされる音だとは、

あたし自身は気付いていない。

また大量の愛液が溢れているのだと思つて、

それを否定するよう首を振つた。

「か、感じてなんかいいの……あたしは、

こんなことで気持ちよくなんか……」

男性たちがにこやかに笑つた。そう見えた。

あたしの言葉が嘘だと言つて、何度も何度も突き立てた。

でも、必死で抵抗しようと思つていた。

男性たちの好きなようにはならない。

彼らを悦ばせるようなことはしない。

ただ、それだけを思つていた。

「ああ！　くっ、来る！　来ちゃうっ！！！」

そしてまたスパーク。

身体中が熱いもので覆われていく。

「はあ、はあ……俺も中で出しちゃつたよ。

こんな名器じや、我慢できないぜ」

男性がなにか呟いていた。

あたしは、おま○この痺れから解放されるのを待つて、

また感じていないと訴える。

「じゃあ、次は俺の番だね。たっぷりとおま○にに出してあげるよ」

また別の男性が股を押し広げて、膣道を蹂躪する。

次に子宮が熱くなるまで、数分とかからないだろう。

それでもあたしは、男性たちへの抵抗を続ける。

（あたしは、負けない……）

完全に気を失ったのは、
それぞれが2回ずつの交替をした直後だった……



この本は同人ソフト「J-Girl Train」に収録されているCGを掲載したものです。

J-Girl Train2 同人誌版

発行 クリムゾン

印刷 大陽出版株式会社

発行日 2007年2月10日

挑発的な服装で
男の反応を
愉しんでいた乱菊は
巧みな痴漢の
テクニックによって
いつのまにか
主導権を奪われ
豊満なボディは
男たちのオモチャに
なりきがってしまう



海でみんなと
はぐれた春菜は
見知らぬ男たちに
囲まれ
水着を剥がされ
イクまで指で
こねくりまわされ…

任務遂行中に
痴漢に襲われた
セフィリアは
上からの命令で
抵抗することもできず
快感に身悶え、
声を殺しながら
絶頂を迎える



周到な痴漢の策略に
はまつた機姫は
逃げることも抵抗する
こともできず
男の言うがままに
ホテルに連れ込まれ
バイフや舌で
イカされまくる

クリムゾン
フルカラー本
第9弾

18歳未満の方は購入できません